

# 上野殿尼御前御返事

文永一一年

五三歳

驚目一貫給ひ候ひ了んぬ。

それ、じきはいろをまし、ちからをつけ、いのちをのぶ。ころもはさむさをふせぎ、あつさをさえ、はぢをか  
くす。人にものをせする人は、人のいろをまし、ちからをそえ、いのちをつぐなり。人のためによる火をともせ  
ば人のあかるきのみならず、我が身もあかし。されば人のいろをませば我がいろまし、人の力をませば我がちか  
らまさり、人のいのちをのぶれば、我がいのちののぶなり。法華経は釈迦仏の御いろ、世尊の御ちから、如来の  
御いのちなり。やまいある人は、法華経をくやうすれば身のやまいうすれ、いろまさり、ちからつき   
てみればものもさわらず、ゆめうつゝわかずしてこそをはすらめ。とひぬべき人のとぶらはざるも、うらめしく  
こそをはすらめ。女人の御身として、をやこのわかれにみすすて、かたちをかうる人すくなし。をとこのわかれ  
は、ひよるよるつきつきとしどしかさなれば、いよいよこいしさまさり、をさなき人もはすなれば、たれを  
たのみてか人ならざらんと、かたがたさこそをはすらるれば、わがみもまいりて心をもなくさめたてまつり、又  
弟子をも一人つかわして御はかの   
一巻の御経をもと存じ候へども、このみはしるしめされて候がごとく、上下にくまれて候ものなり。